

イギリスでの PI ポスト獲得について

保明綾

Lecturer, School of Arts, Languages
and Cultures, University of Manchester



はじめに

今日は「イギリスでのPIポスト獲得について」というテーマで、ポスドクを経てレクチャーになるための就職活動だけでなく、家族と研究の両立のコツについても教えてほしい、とJSPSからリクエストがありましたので、そういったお話をしたいと思います。どこまで皆さんの参考になるかわかりませんが、私なりの経験を活かして、私の軌跡を紹介しつつ、話を進めたいと思います。

まず簡単な自己紹介、私の軌跡を紹介します。学歴ですが、1998年に初めて渡英し、1999年にマンチェスター大学で修士号を取得しました。その後、2003年にマンチェスター大学で博士号を取得しました。このときの専門分野は医史学で、英語で言うとHistory of Science Technology and Medicine。科学技術史も入った広い分野で、人文学の立場から科学と社会のあり方などを追求する学問です。現在は、所属が日本研究というところなので、Japanese Studiesも専門分野とみなしています。

職歴としては、博士号を取得してから日本で1年間、非常勤講師などをしていましたが、2004年にマンチェスターに戻ってきまして、医史学のResearcher Associate、いわゆるポスドクになりました。その後、2008年にケンブリッジ大学のニーダム研究所という科学技術史を専門とした研究所でResearch and Teaching Associateという職に就きました。ケンブリッジ大学で初めて日本研究に出会いました。日本研究というのは、学生が日本語を勉強するための学科で、日本語を学生に教えることが中心となり、職員は日本についての研究を行っています。ケンブリッジ大学着任中に、2009年にWellcome財団のUniversity Awardの助成を受けました。Wellcome財団は医療や科学の研究に対して広く助成金を出しており、University Awardというのは専任のPIポスト獲得につながる助成金です。ケンブリッジ大学の職は任期付き3年間のポストだったので、こちらを1年間に短縮して、Wellcome財団のUniversity Awardを受け、マンチェスター大学に移りました。以前のポスドクときは医史学だったのですが、マンチェスター大学では日本研究学科に所属するこ

とになりました。2009年から2015年は Wellcome Research Fellow として第3期のポスドクをやり、ようやく2015年から Lecturer として勤務しています。

ここで前置きなのですが、本日私がお話しする内容は、私自身の個人史で一般論ではない、ということです。よって、参考にはなるかもしれませんが、最終的には皆さんそれぞれ自分自身のスタイルを大切にさせていただきたいと思います。さらに前置きとしてもう一点付け加えていただきたいのですが、私のキャリア構築にとって、人と運に恵まれた、というのは非常に重要な要素だったと思っています。これは私自身の能力や頑張りとは関係ないわけですが、運などの外的な要素もキャリア構築のためには大切だと感じています。

PI ポスト獲得への道のり

今回、この講演を準備するに当たって、落ち着いて自分の軌跡を振り返ることができました。普段は、日々の業務に追われていて、なかなか自分の過去を振り返ることがないので、今回の講演は私にとっても貴重な機会になりました。その振り返りの中で、PI ポスト獲得をテーマに考えてみると、私のキャリアは3つの時期に分けられる、と思いました。3つというのは、最初が院生時代、2つ目が長いポスドク時代、3つ目が研究員時代、これは今の Lecturer につながる Wellcome Research Fellow 時代のことです。この3つの時代について、どういった点が皆さんの役に立つか、ということ念頭においてお話ししたいと思います。

最初の院生時代ですが、後から振り返ってみて、院生時代にやっていたよかった、と思えることは査読論文の執筆です。分野によっては早い時期から査読論文を書くのが当たり前だと捉えられているかもしれませんが、人文学では院生時代に査読論文の執筆までなかなか踏み出せない学生が多いのです。しかし、私の場合は周りの雰囲気よかったのだと思います。周りの院生らが査読論文を書くのが当たり前といった風潮があったので、私も査読論文を書いて、PhD を取得したときには査読論文が1本出ている、という状態でした。これは後々、評価のポイントにつながっていたことを聞きました。

さらに、PhD コース3年目のときには次のステップにつながる人脈作りを始めました。人脈作りといっても、学会に行って名刺交換して、という形式的なことではなく、私の場合は、実際に先生に会いに行きました。私は医史学、特にお産婆さんの

歴史を研究していたのですが、関連分野にいる先生で、一緒に研究してみたいと思う先生には片端から連絡を取って会いに行きました。将来的にこういう研究をしたい、という話をして、何かプロジェクトはできませんか、と直談判に行きました。

もうひとつ、結果的によかったと思えることは、柔軟な対応をした、ということです。先ほど申し上げた通り、いろいろな先生に当たったのですが、PhD取得後、最終的には当時の自分の専門とは違った真菌学の歴史プロジェクトでのポスドク研究に従事することになりました。これはもともとプロジェクトがあって、担当教授がやってみないか、と提案してくれたことで成り立ったのですが、最初は専門が違うので、新しいテーマにチャレンジすることは確かにこわかったです。しかし、最終的には柔軟に対応しました。結果的には、そのおかげで、研究内容もテーマも拡大していったので、プラスになったと思います。人文学のPI職は研究に専念できるわけではなく、授業も大切な要素なので、幅広いテーマの授業を提供できる、ということは強みになると思います。そういう意味で、私の場合は、院生時代からポスドク時代につながる過程で柔軟な対応をしたというのが重要だったかと思います。

さて、次のポスドク時代ですが、この時代はとにかく査読論文を書くことに専念しました。さらに人脈を広げることにも力を入れました。ここでプラクティカルなアドバイスののですが、メールにはなるべく即答した方がよいです。当時の私がそうしていた、というのもあるのですが、今、自分がLecturerの立場になってみると、メールに即答してくれる人は、しない人に比べて気に留める率が高いかと思います。メールに即答するのは礼儀でもあるし、自分にとってもプラスになると思います。

ポスドク時代はもちろん就職活動をしていたわけですが、ここで大事だと思うのは、「今」ではなく「次」ということです。PhDを取得して就職活動をしている若手研究者、当時は私もその一人だったわけですが、若手研究者は得てして「今」を強調しがちです。例えば、就職活動のためのプロポーザルでは「今、このような研究をしています」「今までこういうことをしました」「このような論文を書きました」ということを綿々と書くのですね。しかし、今、審査する側になって知りたい点は、今ではなくて次に何をしたいのか、「今」の研究をもとにした「次」の研究はどういうものなのか、といった将来的ビジョンに関することです。ですので、申請書類において「次」の計画をしっかりと描き出せると素晴らしいのではないかと思います。面接で

も、必ず「次は何をしたいのか」と聞かれますので、「今ではなく次に何をしたいのか」を前もって考えておくとよいと思います。

最後に、先輩や経験者に指示を仰ぐことも大事です。私の場合は、先ほど運がよかったと言いましたが、担当教授が経験豊富な先生だったので、いろいろなアドバイスを仰ぐことができラッキーだったな、と思います。先輩や経験者は、それまでの経験がありますから、少しでもアドバイスを求めるのは、イギリスだけではなくて世界共通で重要なことだと思います。

30代後半の研究員時代に入ると、もちろん査読論文や共著論文の執筆もしたのですが、この時代のユニークな特徴としては、次の Lecturer になるための準備期間をしていたという点です。PI ポストを獲得するには、研究が素晴らしいことは当然なのですが、プラス・アルファとして、授業や日々の業務もできるようになる、ということが必要です。私の研究員時代で意識していたポイントは、「自分」ではなく「相手」ということでした。研究でも授業でも「相手」を意識するようになりました。

人文学の場合、往往にして給料は授業料から支払われていることを先輩達から教わりました。つまり、大学では主役は自分ではなくて相手なんですよ、ということです。自分が何を研究で伝えたいのか、ということではなく、どうすれば相手に自分の言いたいことが伝わるのか、ということに専念しました。今もそれをモットーにしています。学生に自分の研究内容が伝わっているのか、学生が授業内容を理解しているのか、というのは、毎日心に留めています。

Lecturer としてのやりがい

いろいろありますが、1つ目として、好きなことが仕事というのがこの職の醍醐味ですね。2つ目は、日々発見。毎日授業をやっていると学生からの指摘もありますし、自分が研究や授業で新しいテーマに取り組んでいると、日々発見があって面白いです。3つ目は新たな出会いの連続。毎年、新しい学生も入学してきますし、新しい研究を始めれば新しい出会いがあります。研究も授業も視野に入れた上で、このようなやりがいがあると思っています。

家庭と研究の両立のコツ

最後に、家庭と研究の両立のコツについて、私流の6つのコツをお話したいと思います。ここで前置きですが、みなさんの中には、例えば、ご両親の介護をしつつ研究をなさっている方もいらっしゃるかと思いますが、今回のお話に関しては、小さな子どもがいる家庭と研究の両立についてのお話に専念しますので、ご了承いただければ幸いです。さらに、このテーマに関しては、皆さんには皆さんご自身のやり方があると思いますので、ご参考までに聞き流していただければと思います。

1つ目は長期的視野に立つ、ということです。私の場合は、計画して子どもを作ろうとしたわけではないのですが、計画性のある方の場合、とりあえず子どもができる前に論文執筆と人脈作りを先にしておく、これは大事だと思います。2つ目は大きく構える。いろいろ計画してみても、一旦子どもを持って感じるのは、計画は崩れて当たり前ということです。計画が崩れたときにどう対応するか、ですが、大きく、「でーん」と構えていれば何とかなるのではないかと思います。例えば、家は少々汚くても大丈夫です。子どもは何とか育ちます。愛情さえ与えていけば子どもは育つ、というのが保明家のモットーです（笑）。これに関連して3つ目は、計画性を持ちつつも柔軟な対応が大事、ということです。例えば、先週の話ですが、きちんと計画を立てた折に学校から電話が来て、子どもが熱を出したということで迎えに行かないといけないということがありました。こうなったときは柔軟に対応します。仕事を中断して、子どもを迎えに行きます。子どもが寝ている間メールチェックだけはする、そういうふうに柔軟に対応するのも大事だと思います。4つ目は任せる、ということ。女性のなかでは、夫に子どもは任せられない、と敷居を高くしてしまう方もいらっしゃると思います。しかし、任せられるところは全部任せる、夫が何をしようが任せたものは任せる、そういう態度が大事だと私は思います。5つ目としては、考えを変えてみる。子どもを持つことは研究にとっては足を引っ張るマイナス要因だと考える人もいます。確かに、時間的にはマイナス要因かもしれません。しかし、私の場合は、プラスに作用している場合もあると感じています。例えば、子どもに事象を説明することは案外難しいのですが、子どもが理解できるレベルで説明することを繰り返すうちに、論文が以前よりもすらすらと書けるようになった、と感じています。こういった風に考え方を切り替えてみる、というのもひとつのコツなんじゃないかと思います。そして、最後6つ目は、一過性だということです。子育てというのは一過性だ

ということです。子どももいつかは大人になる、子育ては実はほんの数年間だけが大変なだけで、その後は何とかなる、ということですね。

こういうコツを述べたところで、終わりにしたいと思います。ご静聴ありがとうございました。